

## 「遠くの者にも近くの者にも」(エフェソ2章14-22節)

### 1 遠くの者にも近くの者にも

初代教会の歩みをつづった使徒言行録、またとくにパウロの手紙などを見れば、当時の教会が直面していた問題ないし課題の一つに、ユダヤ人キリスト者とユダヤ人でないキリスト者の関係の問題があつたということが分かります。ユダヤ人でない人のことを聖書では総称して異邦人と呼んでいます。ユダヤ人でも呼んでいません。同じキリスト者でありながらユダヤ教からキリスト教徒になつた人と、もともとユダヤ人ではなく、また宗教としてのユダヤ教とも関係がない、知らない、そういうところからキリスト者となつた人とのあいだで、考え方や生活の仕方などに違いがあり、時に対立し、軋轢が生じ、こころの中でも敵意をいだき合っていた、個人の問題としてではなく、もっと大きな問題としてあつたことが分かります。

はじめてエルサレムに誕生した教会の構成員はすべてユダヤ人でした。伝道した人も、たとえばペトロとかヤコブですが、ユダヤ人、伝道の相手もユダヤ人でした。ですから教会はイエスをメシア(救い主)として信じるユダヤ人の集まりとして成立したのです。そこに異邦人、すなわちユダヤ人にとつての外国人が加わるようになりません。伝道が進み、キリスト教がユダヤ人の主たる居住地であるパレスチナを越えて広がっていくようになると、異邦人はますます多くなり、やがて教会の構成員はほとんどがユダヤ人でなくなります。そこまでに至る過程で、ユダヤ人キリスト者と異邦人キリスト者のあいだには軋轢、対立が少なくなつた。とくにユダヤ人が伝統的に大切にしてきた律法、とくに割礼、それをユダヤ人キリスト者はキリスト者になつても守っている、その理解や、信仰におけるその位置づけ・意味づけが問題となり仲違いの大きな要因となつたのです。

このユダヤ人キリスト者と異邦人キリスト者の対立に一つの決着をつけたのが、使徒言行録15章に伝えられている、紀元49年頃と言われています。エルサレムにおける使徒会議です。この会議開催のきっかけになつたのは、ユダヤ人キリスト者が、各地で、人が救われるには信仰だけでなく、ユダヤ人が守ってきた掟や習慣、たとえばその一つである割礼を異邦人キリスト者も受けないと救われないと主張するようなことが起こつたからです。彼らは信仰を否定したわけではありませんが、それに加えて割礼「も」必要である、律法「も」必要であると言つたのです。そのためパウロらとのあいだで激しい意見の対立と論争が起こります。これを話し合うために使徒たち長老たちが集まって開かれたのがエルサレムの使徒会議です。協議が重ねられそれをまとめる演説をペトロがしています。それによれば律法を守ることによつてではない救いの道、ただ福音の言葉を信じて救われる道、ただ主の恵みによつて救われる道を神は開いてくださった、自分もまたその証人である、そして律法を守ることも必

要だと言っている人たちは、自分たちもその先祖たちも守ることのできなかつたものを、異邦人に押しつけている、それは欺瞞であり、神を試みることになると言ってユダヤ主義者の主張を退けたのです。

パウロがエフェソにはじめて伝道したのは、このエルサレムの使徒会議の翌年であったようです。その様子は使徒言行録(19-20章)に詳しく伝えられています。パウロはそこに約3年間、彼としてはかなり長期に滞在し、近辺にも伝道し、大きな成果を収めます。「アジア州に住む者は、ユダヤ人であれギリシア人であれ、だれもが主の言葉を聞くことになった」(16章10節)とあります。「だれもが」という言葉に、すでにそうしたユダヤ人や異邦人か、あるいはユダヤ人キリスト者か異邦人キリスト者かといった問題を乗り越えて、教会が新しいステップを踏み出した、そうした喜びの声を私は聞くことができるように感じます。遠い者にも近い者にも、だれにも福音が伝えられる時代が来た。今日の聖書箇所で「遠く離れている」と言われているのは異邦人、異邦人キリスト者です(12節)が、彼らはまた今や「近い者となった」(13節)とも言われています。ですから遠い近いはその意味を失った。だれにでも、かつて神を知らず、希望もなかつた者にも、救いの道は開かれた。いや救いにあずかつたあなた方こそ、今や教会の真の担い手、そうした確かなパウロの思いがここにあるように思います。

## 2 キリストによって

しかし恵みが遠くの者にも近くの者にも、つまり万人に開かれたことは、時間が経つうちに、時流で、成り行きからそうなったものではありません。じつにそれこそイエス・キリストが、その十字架の死と復活によって開いた道なのです。それ以外の仕方では開かれなかった、ただキリストの開いた道なのです。

実に、キリストはわたしたちの平和であります。二つのものを一つにし、御自分の肉において敵意という隔ての壁を取り壊し、規則と戒律づくめの律法を廃棄されました。こうしてキリストは、双方を御自分において一人の新しい人に造り上げて平和を実現し・・・(14-15節)。

簡単にいえば、先ほど言及したペトロの演説にあったように、律法を守ることによってではない救いの道、ただ福音の言葉を信じてあずかる救い、ただ主の恵みによって救われる道が、イエス・キリストによって開かれたということです。律法による道、律法を行うことによる救いの道は廃棄された、それは行き止まりであることが明らかにされたということです。「隔て」と訳されているのは垣根のことです。垣根とか壁とかいう言葉はユダヤ人たちが神の民としての自分たちを異教徒から純粹に守りつづけるための律法ないしその律法を守るための規則・細則を指して使う言葉です。それ

が無効になったのです(ガラテヤ3章28節)。

しかし敵意はどうでしょうか。それは心の問題です。ユダヤ人キリスト者は異邦人キリスト者を心の中で、彼らはもともと神の民として選ばれたわけではないと見なしさげずんでいます。逆に異邦人キリスト者もユダヤ人キリスト者を、彼らは古い律法にしばられていると行ってこれを否定します。そうした心の奥底にある敵対する心そのものが取り除かれなにかぎり、二つのものが一つになり、そこに平和が実現することはありません。

今日の箇所はキリストが「御自分の肉において敵意という隔ての壁を取り壊し」と言っています。キリストは彼に敵する者たちの嘲りを一身に引き受けられた、それによって人の敵対する思いを吸収しつくしてそれに終止符を打たれたのです。私どもにはなお敵意は残っている。じっさいそれを人は自分で取り除くことはできない。それは聖書が罪と呼ぶものです。シモーヌ・ヴェイユというフランスのユダヤ系の女性思想家が罪のことを「重力」として語ったことがあります。それは私どもをたえず下へ引く張っています。気がつけば敵意はくり返し生じ、人をけがします。反対の力が加わらなければ私どもはそこから抜け出すことはできない。上へと引き上げる力、ヴェイユはそれを「恩寵」(恵み)と言っています。この引き上げる力がイエス・キリストにおいて、彼のその復活において一度決定的に働き、敵意そのものが滅ぼされたのです。私どもはそこに頼む以外にない。また頼むことが許されています。

### 3 共に建てられる

主イエス・キリストによって、ユダヤ人と異邦人、ユダヤ人キリスト者と異邦人キリスト者のあいだに交わりができ、両者は一つとされたと見えています。キリストの十字架によって横の連帯が生まれただけではありません。縦の連帯も生まれました。キリストによって共に神に近づくことが出来るのです。キリストの十字架の縦棒は神と人をつなぐものです。それゆえこう言われます。「十字架を通して、両者を一つの体として神と和解させ、十字架によって敵意を滅ぼされました。・・・それで、このキリストによってわたしたち両方の者が一つの霊に結ばれて、御父に近づくことができるのです」(16,18節)と。

「一つの体」となるとパウロは書きました。そこで彼は教会について語り始めることとなります。

従って、あなたがたはもはや、外国人でも寄留者でもなく、聖なる民に属する者、神の家族であり、使徒や預言者という土台の上に立てられています。そのかなめ石はキリスト・イエス御自身であり、キリストにおいて、この建物全体は組み合わされて成長し、主における聖なる神殿となります。キリストにおいて、あなたがたも共に建てられ、霊の働きによって神の住まいとなるのです(19-22節)。

教会において、ユダヤ人であるか異邦人であるかは、もはや少しも問題にはなりません。そこに民族的な差別があつたり敵意が支配したりするようなことがありませんし、あつてもならないことです。

二十世紀末にいわゆる冷戦が終わり、民族や宗教がむき出しのまままで対立抗争し合う時代に入つて久しくなります。民族というのは神が創造の時点で定められたものではありません。ただ事実的に異なるだけであつて、それは一度身につけてもまた再び脱ぐ「巡礼の着物」(バルト)のようなものです。何か絶対的に異なっている、相容れないというのではないのです。共存、共生の不可能なものと受け取られるなら、それはまったく不幸なことです。教会も、たとえばここでユダヤ人・異邦人という対立を乗り越えて新たなステップを刻んだにもかかわらず、これまでの歴史の中で民族的なものにとらわれて誤つた道を歩んだことがあります。キリストは二つのものを一つにして私どもに平和をもたらし、神との和解をもたらし、この根本に立つて私どもは今の時代を歩んで行くべきです。

ここで教会がいくつかの比喻をもつて語られています。十分お話できないことを残念に思いますが、簡単に取り上げておきます。

神の家族と言われております。一つの比喻です。教会が家族にたとえられるのはここだけではありません。すでに私どもは、私どもは霊において一緒になつて「御父に近づくことができる」ということを聞いています。私どもはひとりの父をもつ兄弟であり姉妹であるということです。長子はキリストです。一つの霊が、私どもに一致をもたらし、霊の現実にいわば家風のようなものとして、私ども一人ひとりそれにあずかるのです。

パウロはさらに教会を一つの建築物のように見えています。「使徒や預言者という土台の上に立てられています。そのかなめ石はキリスト・イエス御自身であり、キリストにおいて、この建物全体は組み合わされて成長し、主における聖なる神殿となります」。「かなめ石」とは建物ができあがつたときに重しのように置かれる大きな石のことです。あるいは土台の隅におかれる「おや石」であるとも言われます。いずれにせよイエス・キリストです。「使徒や預言者」という土台とは、使徒たちや預言者たちの教えのことだと考えれば、それは聖書です。聖書という土台の上に教会は建てられます。

この建物は「成長」するといわれます。ここでは組み合わせられることによつて成長すると言われています。組み合わせられることが成長することです。多様な一人ひとりが多様なままに組み合わせられます。「あなたがたも共に建てられ」とパウロは言っています。教会の霊的な意味での建設を神は私どもなしになそうとなされたい。私どももまた参与し用いられる、そのことを感謝して、神と教会に仕えていきたいと願っています。

(2018年6月10日)